

# (11) 中村南小学校

学 校 長 益永 美佳  
校内研究代表者 近森 圭悟

## 1. 研究主題 「見方・考え方を働かせ 資質能力を育成する 全員参加型の授業づくり ～思考過程の可視化と共有の工夫を通して～」

### 2. 主題設定の理由

これまで本校では、学習指導要領の趣旨を踏まえて、算数科を中心に『見方・考え方を働かせ、資質能力を育成する授業づくり～「問い」を作るための学習過程・指導方法の工夫～』を目指して、児童が主体的に学習に取り組めるよう、必然性のある「問うべき問い」の追及を中心に研究を深めてきた。その中で、問いを解決した後に、新たな問いが生まれてくるといった、問いが連続する授業展開の確立まで授業の質を高めることができた。また、問いへのこだわりに加え、ICTの効果的な活用にも取り組んできた。その中で、ICTの活用により、思考過程を可視化し共有する協働的な学びの充実が図られることに気付くことができた。そこで今年度は、昨年度までの「問い」を大切にしながら授業づくりを基盤とし、新たに『見方・考え方を働かせ 資質能力を育成する 全員参加型の授業づくり～思考過程の可視化と共有の工夫を通して～』という研究主題を設定することで、ICT等の効果的な活用により実現可能となる「思考過程の可視化や共有」により磨きをかけていく。そして、見方・考え方を働かせ、誰一人取り残さない全員参加型の授業を日々行うことで、資質能力を育成できるように研究を深めていくものとする。

見方・考え方を働かせ、資質能力を育成する、全員参加型の授業づくりにあたっては、次の3つをポイントとする。

#### 1 問うべき問いの設定

児童の主体的な学びが実現できるよう、必然性のある「問い」が生まれる授業を仕組むこと

#### 2 見方・考え方を働かせる

問題解決のために、どんな既習事項が活用できるか協働的に探究し、見通しを持つことで、解決方法を見出す授業を展開すること

#### 3 全員参加型

思考過程の可視化と共有を図り、みんなで学び合い、誰一人とり残さない授業を行うこと

以上のポイントを組織的・日常的に意識して授業を行い、「知・徳・体」のバランスのとれた児童を育成していく。

### 3. 研究の進め方と方法

授業（学習展開）研究にあたっては、授業の質的充実をめざして、主題設定のねらいや研究の視点に即して、研究実践をしていく。また、めざす児童像を常に意識し、子どもたちの「生きる力」として身につけていくよう実践していく。

〈授業研究の視点〉

①児童の主体的な学びが実現できるよう、必然性のある「問い」が生まれる授業であったか

【問うべき問いの設定】

②問題解決のために、どんな既習事項が活用できるか協働的に探究し、見通しを持つことで、解決方法を見出す授業であったか【見方・考え方を働かせる】

③思考過程の可視化と共有を図り、みんなで学び合い、誰一人とり残さない授業であったか

【全員参加型】

- ・研究授業だけでなく、日常の授業を工夫・改善していくために、それぞれに視点をあてた学習を展開していくよう取り組んでいく。
- ・校内研修の中で日々の実践例を紹介しあい、事例研究を行っていく。

#### 4. 今年度の成果と課題

##### ◇高知県学力調査（県平均比）

4年国：+13.0 算：+19.9  
5年国：+8.0 算：+16.8 理：+11.8

##### ◇標準学力調査（目標値比）

1年国：-6.6 算：+0.2  
2年国：-8.7 算：-5.7  
3年国：-3.8 算：+0.4  
6年国：-2.8 算：-3.5

評価項目	1学期 (2.9)	2学期 (3.2)
①既習事項を確認し、見直しを持たせている。	3.0	3.6
②児童にとって身近なものや生活体験等の話題を導入材料にするなど工夫して、児童に解決したいという問いを持たせ、めあてを設定している。	3.0	3.1
③これまでの学びから、自分の考えと友達の見方・考え方を比べ、何に注目させるのかを明確にし、めあて等に見方・考え方を示す。	2.7	3.2
④問題解決の過程や結果を、具体物、図などを活用したり、ICTを活用したりして、数学的に表現し、伝え合う。	3.1	3.3
⑤誤答を取り上げ全員で検討するなど、誰一人とり残さない全員参加の授業を行っている。	2.5	3.0
⑥本時で育成する資質・能力に合った適応問題に取り組ませている。	2.5	2.7
⑦条件を設定し、振り返りを書かせている。	3.0	2.0
⑧主体的に自ら問いを持ち、粘り強く問題を解決している。	3.2	3.6
⑨既習事項や概念をもとに、数学的な表現を使って自分の考えを説明している。	2.8	3.2
⑩結果ではなく過程に着目し、友達と考えや意見を交流しながら、協力して学び合っている。	2.8	2.8

◇授業参観評価（平均）3.2 ◇家庭学習時間達成率88% ◇市販Exテスト 71.3%

##### 【成果】

○高知県学力定着状況調査において伸びが見られ、目標としていた四万十市の平均を上回ることができた。本校の児童は通塾率が低いことを踏まえると、授業改善の成果だと言える。

○授業改善の行動統一を図るために行っている管理職による授業参観の評価においても、1学期と2学期を比較すると、ほとんどの項目で伸びが見られた。特に、本校が柱にしている「問い」・「見方・考え方」・「全員参加型」に関係する項目②・③・⑤が全て上昇していることから、継続的・組織的に授業改善に取り組むことができたと言える。

○算数科を中心に進めてきた授業改善が、算数科以外にも波及していった。例えば道徳科では、1人の考え方を全体に投げかけたり、気持ちを共感的に理解させたりする発問を仕組むことで、全員参加につながる事ができた。

##### 【課題】

- 本時で身に付けた資質・能力を自覚化させたり評価につなげたりするための適応問題や振り返りを行う授業が少ない。1時間で授業が完結できるよう、タイムマネジメント力の強化をいていく必要がある。
- 高知県版学力定着状況調査の観点別正答率の「主体的に学習に取り組む態度」に注目すると、4年生は70.3%・5年生は58.6%であり、「知識・技能」・「思考・判断・表現」と比べると低い結果が見られた。つまり、学習意欲に課題がある。子どもの主体性をより高めるために、生活場面を学習問題に関連付けるなどの導入の工夫や、統計的な問題解決活動を充実させる等の手立てをさらに講じ、数学的活動のサイクルを子ども自身で回すことができる、自律した子どもを育てていく必要がある。
- 学力の二極化が進んでいる。高知県版学力調査や全国学力・学習状況調査だけの分析ではなく、標準学力調査からも誤答や解答累計から分析を行い、日々の授業改善や個別の支援につなげていく。

次年度は、算数科を中心に研究を進めていくとともに、他教科においても、

- ・必然性のある問いが生まれたかどうか、問いがループする授業であったか
- ・見方・考え方が働くために、既習内容をどう関連付けさせ、それをめあて等に明示できたか、そして単元を通して見方・考え方が成長できる構成であったか
- ・全員参加型の授業づくりのために、誤答を取り上げたり、思考過程を可視化し、共有させたりする場面を設定できていたか

の3本柱を合言葉に、組織的に能力ベースの授業づくりに取り組み、学習指導要領の趣旨をふまえた授業改善を推進していきたい。